

Title	二十世紀アメリカ国民秩序の形成( Abstract_要旨 )
Author(s)	中野, 耕太郎
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2015-03-23
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/doctor.r12906">http://dx.doi.org/10.14989/doctor.r12906</a>
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（ 文学 ）	氏名	中野 耕太郎
論文題目	二十世紀アメリカ国民秩序の形成		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、20世紀におけるアメリカ・ナショナリズムの史的展開を、社会史の視座から明らかにしようとするものである。特に、1920年代中葉に成立し、少なくとも1960年代までひとつの社会秩序として持続する20世紀前期のナショナリズムに注目し、アメリカ国民社会の形成過程の歴史の実態を考察する。</p> <p>本論文が一貫して追求しているのは、19世紀までのアメリカ・ナショナリズムから20世紀のナショナリズムへの変容がどのようなメカニズムの中で起こったかという問題である。19世紀までのアメリカ・ナショナリズムが、自由、平等、民主主義といった普遍的信条に基づく法的・形式的な平等を国民統合の基盤としたのに対し、20世紀前半に現われるアメリカ・ナショナリズムにおいては個々の国民のエスノ・レイシャルな属性が国民共同体の編成原理として重視され、そのようなナショナリズムに依拠するアメリカ国民国家は、社会に対して介入的で監視者的な統治を発展させた。本論文は、そのようなアメリカ・ナショナリズムを単なる哲学的な思惟や情念として見るのではなく、歴史の中に実在した一つの制度や権力の様態、すなわち、思想と制度と暴力の束としての国民的秩序ととらえる。実際、1920年代中葉までに様々な法制度や慣習等の形をとって実体化される20世紀ナショナリズムは、その形成過程において、同化と異化のあり方をめぐる複雑な闘争の歴史を持ち、関連する専門知を拠り所とする適応と改革の実践が幾重にも蓄積されたことの結果でもあった。それは、観念的なナショナル・アイデンティティとしてではなく、むしろ、暴力や法による強制と科学的な学知による権威づけによって構成される一つの集合的秩序というべきものである。</p> <p>18世紀の革命で理念国家として出発し、19世紀を通じて「自由の国」としての自画像を確立したアメリカが、いかにしてエスノ・レイシャルな「国民国家」に変転したのかについて、本論文では、20世紀初頭に現われた「アメリカ化」と「カラーライン」という二つの動向に注目して分析している。「アメリカ化」とは、移民の文化的同化を主に意味しており、連邦や州などの公的セクターや民間の結社が主体となって外国系住民を対象とする英語プログラムや市民教育を推進したことを指している。他方、「カラーライン」とは、優生学など当時の科学的学知をも動員しつつ、黒人を二級市民化し、アジア系を「国民」の外部へと追いやる人種隔離を意味している。20世紀転換期に南部諸州で始まった人種隔離は、第一次世界大戦期の黒人の北部移住を契機に全米に拡大し、1924年にはアジア系移民を「帰化不能人」として入国禁止とする人種主義的な移民制限法が成立する。本論文は、このアメリカ化という国民統合とカラーラインによる分断の政治とが同時に進行することの意味を重視し、20世紀初頭に現われるエスノ・レイシャルなアメリカ・ナショナリズムの実態を詳細に検証している。</p> <p>その際、理念国家の「人種化」とも見える20世紀の展開が、当時のアメリカに顕著な急激な工業化や都市化と深い関わりがあることに本論文は注目している。20世紀初めにシカゴやニューヨークのような巨大メトロポリスで深刻化した貧困問題や移民問題は、革新主義者と呼ばれた知識人や都市改革者に国家・全体社会と個人の間に「社会的なもの」の存在を強く認識させた。彼らの多くは、20世紀のアメリカにおいては、新しい工業化社会に適合した、「社会的な」シティズンシップが確立されねばならないと論じたが、「社会的なもの」は、当時の都市社会の現実の中で、非常にしばしば、エス</p>			

ニックな何か——移民労働者の貧困と疎外、移民街の孤立、黒人地区の犯罪、人種間の暴力、等々——としても想像されていた。ここに20世紀転換期の「社会の発見」は、エスノ・レイシャルなナショナリズムの形成を歴史的に基礎づける媒介者としての役割を果たすことになる。

同時に本論文は、同時代の社会思想や政府の人種・民族政策だけでなく、労働の問題に注目している。人間の生活の源泉であり、分業を通じて社会秩序の要をなす活動たる労働は、まさに近代が発見した「社会的なもの」の中核であった。特にこの時期、産業民主主義という思潮が台頭したことは重要だった。それは、移民や有色人を含む労働者には、公民としての市民的な権利だけではなく、働く者として当然保障されるべき産業内市民権と呼びうるものがあるという議論だった。しかし、この「社会的な」シティズンシップの要求は、実際の運動が多くの人種や移民労働者を巻き込んで展開する中で、移民のアメリカ化や人種隔離の問題と結節点を持ち、それ自体エスノ・レイシャルな排斥感情と無縁ではなかった。その意味でも、労働は1920年代に確立していく新しい国民秩序を理解する上で欠かせない視点である。

こうした問題群を総合的に分析する本論文は、1890年代から1920年代中葉に至る20世紀ナショナリズムの形成過程を3つの時期に区分し、それぞれ第I部（第1章～第4章）、第II部（第5章～第7章）、第III部（第8章～第10章）として論じている。

第I部の課題は、革新主義期における「社会」の発見が、どのような文脈で国民統合を要請し、また国民内の境界を築いていったのかを検討することである。第1章では、20世紀転換期にアメリカの伝統的な平等概念に社会的な含意が加わっていく歴史的展開に注目し、主にアメリカ思想史における社会の発見の意味を考察している。第2章は、社会的でありかつエスノ・レイシャルである20世紀ナショナリズムの出現が、アメリカ民主政の変容とどのような関係にあったのかを検討している。第3章は、都市問題の現状に焦点を当て、アメリカにおける「貧困問題の発見」がいかに住民のエスノ・レイシャルな序列化や人種分断を惹起したかを検証している。第4章では、シカゴの公立学校における外国語教育をめぐる議論を取り上げ、「アメリカ化」が進むこの時期に、国家の制度たる公教育においてヨーロッパ系移民の母語教育が外国語科目として認められていく過程を描いている。

第II部は、第一次世界大戦期の国民形成に関わる諸問題を分析し、20世紀初頭の言論人や社会活動家が論じた「国民」がどのように権力政治の中に組み込まれていったのか、また、参戦を契機に行政国家と「社会的なもの」の相互浸透がいかに進んだのかの考察を課題としている。第5章は、第一次世界大戦期に産業民主主義の潮流が国民的な議論として台頭する様相を描き、その中で移民労働者の積極的な包摂を主張する社会民主主義に近い勢力が伸長したことを明らかにしている。第6章は、東欧系移民と戦時政府の複雑な関係に特に注目し、戦時動員体制の中から多元主義的なアメリカ化路線が国策として形成されていく事実を指摘している。第7章は、黒人の戦争経験に注目し、黒人に対しては東欧移民のような「同化」政策がとられず、連邦政府と軍の公式の政策として人種分離が行われたことを明らかにしている。

第III部は、第一次世界大戦後の政治・思想動向に焦点を当て、第I部、第II部で明らかにしたアメリカ化や人種政策が長期に継続する「秩序」として定着していく過程を示すことを課題としている。第8章は、戦争直後の一時期に、移民や黒人の不熟練労働者を包含した産業民主主義の運動（シカゴ労働党）が大きく成長したことに着目し、アメリカ化の一つのオルタナティブの可能性を検証している。第9章は、第一次世界大戦後から1920年代初頭にかけて、全米に拡大する人種暴動の問題を考察している。特にシカゴ暴動の詳細な記録を検証し、暴動が恒久的な居住区の分離と労組の人種分断を生み出す過程を明らかにしている。第10章は、1924年移民法の成立過程に注目し、ヨーロッパ系移民の内的

序列化（南・東欧移民の蔑視）とアジア系の包括的な排斥が法制化される経緯を明らかにしている。その上で、ここに完成される20世紀国民秩序のカラーラインが、民主的な市民社会の擁護というレトリックの下に進められた事実と、それが今日までのアメリカ社会に与える影響の深さを強調する。

以上の考察から、終章では、結論として、20世紀アメリカ国民秩序が固有の集合的collectiveな性格をもつものであったことを強調する。すなわち、この現代的なナショナリズムは、当初から、先行する時代の個人主義的世界観を超克しようとする強い衝動を抱えていた。そのことは、二つの次元でアメリカの市民社会にある種の「集団性」を認容する心性を生むことになった。第一は、国民国家統合の課題として、新しいナショナルな紐帯や共同意識を創出する必要が広く認識されたことであり、第二は、これと一見矛盾する展開だが、国民の下位集団（特にエスニックな）への集合的帰属を不可避の現実として受け入れる多元主義が一定の定着を見たことである。

国民形成における能動的でコレクティブな側面は、20世紀転換期の革新主義が、アメリカの国民的信条たる民主主義や平等思想に「社会的な領域」を見出す中で生まれたものであった。それは、一面では後の福祉国家への道を準備する思潮であったが、同時にエスノ・レイシャルな境界を形成するとともに、エスノ・レイシャルな集団の間に序列を形成する運動であった。それは、個人の自由と市民的平等を基軸とした従来の理念的なナショナリズムとは相当に異質な統合原理と見える。しかし、この新しいナショナリズムは歴史的には、19世紀的な市民ナショナリズムに対抗するものというよりは、むしろ「市民的なもの」——すなわち、市民的美徳や市民資格などをエスノ・レイシャルな語彙で上書きし、再定義する形で表現されていった。その際、識字や貧困、あるいは生活水準をめぐる「社会的な」言説が、20世紀的な人種主義と市民性の語りとを媒介した。「市民」と人種は互いを定義し合う関係にあったのであり、この二つが分かちがたく結びつくことにより20世紀ナショナリズムの凝集的な共同性が生み出された。

20世紀国民秩序の集合的性格を示す第二の側面は、それがエスニックな多元主義を包含したことである。元来、多元主義の主張は、主流社会からの同化圧力に抵抗するヨーロッパ系移民指導者の戦略に由来した。移民コミュニティの「承認」を求めつつ、それを可能にするものとして、アメリカ・ナショナリズムを文化的に中立で形式的な統治制度たるものと解釈する多元主義は、同時代の広範な社会事業家や社会学者などからも肯定的に受け入れられ、また、第一次世界大戦参戦期には、移民集団がその構成員に及ぼす規律に注目した戦争指導者や保守的な専門家層からも評価された。しかし、この多元主義は、同時代のエスノ・レイシャルな境界や序列から自由ではなかった。多元性を包括すべき全体社会の市民原理自体が、ますます人種化されつつあったからである。例えば、南・東欧系「新移民」にとっての多元性は、一方では「白人」という特権的サブカテゴリーの中に統合されつつ、他方では「出身国」を理由に「白人」内序列の下位に定位するという形で表現された。20世紀アメリカ国民秩序の展開を通じて、南・東欧移民は、国民社会の主流への参入を許された集団でありながら、セルフ・リスペクトの回復のためにも「公平な」多元主義を希求し続けることになる。

こうして、市民的統合の伝統とアメリカ化、そして現代的な人種主義の複雑な相互作用の中で確立した20世紀国民秩序は、1964年の市民権法が人種隔離を全面的に禁止し、翌65年の改正移民法が1924年法の人種主義的な移民選別を廃するまで、長期持続的な政治秩序として存続することになる。また1970年代以降も、社会的な平等や多元主義をエスノ・レイシャルなものとして思考するこの20世紀国民秩序の遺産は、多文化主義と市民的統合論の論争やアファーマティブ・アクションの是非をめぐる紛争に強い影響を残し続けている。その意味で、本論文の考察は、現在進行形のアメリカ・ナショナリズムの理解にも密接にかかわっている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、20世紀アメリカのナショナリズムの性格とその生成・展開の歴史的ダイナミクスを論じたものである。移民によって建国されたアメリカ合衆国は、一般に、特定の民族的起源を「想像」することの上に成り立つ他の多くの国民国家とは異なるものとされ、様々な出自の人によって構成される「アメリカ国民」とは何か、そのあるべき姿は何かについては、よく知られる「メルティング・ポット」論やF・ターナーの「フロンティア理論」とそれらに対する批判をはじめ、様々に論じられてきた。この問題に対して、近年の歴史学は、移民の社会史、白人性の形成、多文化主義や多元的統合などの観点や方法から研究を進めてきたが、その中で論者が特に注目するのが、普遍的理念を共有する平等な市民の結合による市民的ナショナリズムと人種を基盤とする本有的ascriptiveなナショナリズムとを区別し両者の併存と競合を説く、ロジャー・スミスやゲアリー・ガースルらの「二つのナショナリズム」論である。論者はこの議論の着眼点を評価しつつ、それへのポストモダン的な批判、すなわち市民的ナショナリズムそれ自体が人種的・民族的な階層性や境界を作り出し抑圧性や排他性を有するものであるとする議論にも共感を示す。その上で、「二つのナショナリズム」論とそれへのポストモダンの批判のいずれにも含まれている規範化の傾向、すなわち市民的ナショナリズムに基づく民主的な国民統合を理想とする態度と、その前提となる「普遍的なシティズンシップ」の考え方に疑問を呈し、シティズンシップを公民的、政治的、社会的要素の複合する多義的なものとし、これを歴史的動態においてとらえることの重要性を強調する。

研究史をそのように批判的にとらえた上で、本論文は、1890年代から20世紀初めにかけての急速な工業化・都市化が惹起した貧困問題や移民問題への対処をめぐる議論の中で、シティズンシップの社会的な側面への関心が高まり、その中から、建国以来の共和主義的な理念ナショナリズムとは異なる20世紀ナショナリズム、すなわちエスノ・レイシャルな含意をもつナショナリズムが生起するととらえ、その生成と展開の歴史的ダイナミクスの分析を主題に定める。シティズンシップの複合性とナショナリズムの性格の変化との関係を問うために、論者は、1890年代から1920年代に至る時期の知識人や社会運動家の思想と行動、居住空間、労働の場、戦時の軍隊と戦争動員などの問題を取り上げ、貧困や不平等という社会問題の発見とその克服の課題の中で、移民に対する同化（アメリカ化）と黒人に対するカラーラインの創出の形で市民の間に境界が創出され、それが国家の中で制度化され定着していく過程を考察している。この考察において、シカゴを具体的な分析の場として取り上げ、都市空間のミクロのレベルに立ち入って上記の過程を分析し描き出したことは、単に一都市の事例としてではなく、この時代に移民と南部から流入する黒人を大量に抱え都市化・工業化のもたらす問題を最も集約的に体現した現場においてアメリカの国家と社会の全体的な変容がどのように展開したのかを如実に示すものであり、ナショナリズムを抽象的な思惟や情念としてではなく「思想と制度と暴力の束」としてとらえるという意味で、本論文の成功を大きく際立たせてさせている。

考察の対象時期は、知識人たちによって「社会的なもの」が発見されそれへの対処をめぐる議論が始まる1890年代から第一次世界大戦に至る「革新主義」の時代、戦争動員を通じて市民の境界をめぐる問題が先鋭化する第一次世界大戦期、新たに立ち現われた秩序が制度として定着する大戦後から1920年代中葉までの時期の三つに分けられており、論者は各々の時期について、都市住民の生活や意識にかかわる社会史的な分析と、その社会史の実態をめぐる知識人や社会運動家などの思想と行動にかんする思想史的な分析とを組み合わせ、それらと国家および地方自治体レベルでの制度

や政策の成立過程とを連関させ、社会史と政治史の間を往還しながら行論を展開する。そのために用いる史料は、同時代人の著作、新聞・雑誌、行政文書、軍文書、政党文書など多岐にわたり、この浩瀚な史料の渉猟が、とりわけ本論文の社会史的な部分の記述に豊かさをもたらしている。

論者は、20世紀転換期の革新主義が、アメリカの国民的信条たる民主主義や平等思想に「社会的な領域」を見出したことから議論を出発させ、「社会的なもの」への注目を一貫した導きの糸とすることにより、アメリカの市民社会が、移民に同化を強いる「アメリカ化」と黒人とアジア系に対する「カラーライン」の創出によって、エスノ・レイシャルな同質性を追求しかつ境界を形成していくダイナミズムを描き出した。「市民」と「人種」という一見矛盾するものが分かちがたく結びつく形で旧来のナショナリズムを新たなものに「上書き」したとのとらえ方は鮮やかであり、「二つのナショナリズム」論に対する新たなナショナリズム論の提示となっている。論者はさらに、白人のサブカテゴリーとしての南東欧移民のエスニックな集合性が、同化圧力に対する抵抗としてばかりでなく、国家の側からも利用価値のあるものとして一定程度認知されることにより、その「公平な」多元主義を追求することが、20世紀ナショナリズムのもう一つの側面となっていることも併せて明らかにした。

このように、本論文は直接には1960年代まで続く20世紀前半の国民秩序を扱いながら、福祉国家論や、多文化主義と市民的統合論の論争、アフーマティブ・アクションの是非をめぐる紛争などとも深くかかわる論点を孕んでおり、その射程は現在にまで及ぶ。また、本論文の描いた20世紀アメリカ・ナショナリズム像は、アメリカが他の多くの国民国家と比べて特殊なのではなくむしろそれらと共通の面を多く持っている事実を浮かび上がらせるものであり、そのことは、たとえば、同じように理念ナショナリズムの国として出発しながらそれが変容し、現在では逆に「移民の国」となっているフランスとの比較、同時代に国民のエスノ・レイシャルな編成を極端なまでに推し進めながら現在では多文化主義の一つのモデルとなっている南アフリカとの比較などを可能にする。シティズンシップとナショナリズムの観点から20世紀の世界史理解を深化させるための素材と枠組みを提供したことも、本論文の重要な貢献と評価される。

審査の過程では、「国民秩序」という用語を用いることの意味についての疑問も出されたが、論者からはそれ自体が複数の主体を前提とし、また担い手を交代させていくものであることが説明されるとともに、本論文で扱うことのできなかったジェンダーやアメリカの帝国主義・植民地主義との関係において、今後この概念をさらに深めていくとの方向性が示された。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2015年3月3日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。